

平成 21 年 5 月 12 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：18～21 年度

課題番号：18320109

研究課題名（和文）非文字知社会と中世の時間・暦・交通通信・流通に関する研究

研究課題名（英文）Study of the society that doesn't use the character Research on time, calendar, traffic communication, and circulation in the Middle Ages

研究代表者

服部 英雄 (HATTORI HIDEO)

九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授

研究者番号：60107521

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：民衆知・暗黙知, 絶対時間・相対時間, 地名地図, 流通, 潮流, 航海技術

1. 研究計画の概要

前近代日本社会は文字による社会ではあったが、反面文盲 illiteracy が多く、非文字社会の側面も濃厚に持っており、文字によらない知識によって人々の多くが行動していた。法制度社会に対する不文律、制定暦日に対する農事暦などがその代表的なものと考えられる。非文字知は経験知・「暗黙知」The tacit dimension と表現されることもあり、ときに民衆知とも表現される。本研究では文字のない世界から前近代、とりわけ中世社会を分析する。文献資料に依存する歴史学がもっとも不得手な分野が非文字の世界である。前近代社会総体の真のありかたを知るために、「非文字知（経験知）」の世界を追跡することは、歴史学には不可欠の作業であるし、有効な視点である。本研究では分析の対象を時間・暦・交通通信・流通とする。

2. 研究の進捗状況

(1) 時間について

中国でも日本でも相対時間、つまり昼時間の均分で行われる時刻制度（不定時法）の方が初現的・自然発生だったと考えた。絶対時間の測定は絶対時計である水時計（漏刻）で行われる。正確さが求められる中、皇帝が管理する絶対時間の登場で、相対時間は表面上では絶対時間（定時法）と交代する。昼夜を問わず会議があった貴族社会では絶対時間が採用され、夜間時刻も測定された。一般社会ではどうか。相対時間（不定時法）と絶対時間（定時法）の両立に香時計が使用された可能性を考えた。香の燃える時間は絶対時間な

がら、目印（こま）を操作することによって相対時間が測定できた。

(2) 航海技術について

夜間の航海について。高倉院巖島御幸記を見ると、貴族が乗った船は夜間航海を避けている。キリシタン宣教師も日本では夜の航海はしないと書いているが、実際には暗くなってからの到着事例はある。遣明船などの遠洋航海では当然に夜間航海した。この場合、北極星を初めとする星座の運行と観察が大きな役割を果たしたが、研究集会においてさまざまな民間信仰にそれが残されているという報告を受けた。

(3) 潮流

長崎県生月島での現地調査。手こぎ船時代、平戸本島・生月島間では潮流が逆の場合でも航海することが必要とされた。沿岸流（反流）と時間帯による潮位と進入可能域について、さまざまな海中地名が記憶されていることがわかり、民衆知として報告した。中世『言継卿記』には伊勢湾横断・南下、三河湾横断の時刻を記した記事がある。これを現代潮位と比較した場合、潮流のみでは圧倒的に不足で、風や人力に大きく依拠していたことを明らかにした。

3. 現在までの達成度

② おおむね順調に達成している。

(理由)

代表者も、分担者もこれまでに途中経過と

して成果を発表してきている。また毎年一度の研究集会でも充実した成果の発表が得られている。おおむね順調に達成していると考えている。

4. 今後の研究の推進方策
最終年度になるので、とりまとめる。

5. 代表的な研究成果
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①橋本雄、室町日本の対外観—室町殿の「内なるアジア」を考える、歴史評論、査読有り、(697)、pp. 53～69、2008年5月
- ②細井浩志、「中国天文思想導入以前の倭国の天体観に関する覚書：天体信仰と暦」、桃山学院大学総合研究所紀要、34(2)、pp. 45～62、2008年、査読なし

[学会発表] (計 2 件)

- ①服部英雄、「チャイナタウン唐坊と宗像大宮司の日宋貿易拠点・筑前国高田牧」、(研究発表, 第105回史学会大会報告)、2008年11月、東京・東京大学
- ②服部英雄、「前近代日本のチャイナタウン・ 코리아タウン」、東北アジア文化学会、2008年11月、大韓民国・釜山・釜慶大学

[図書] (計 2 件)

- ①細井浩志、『古代の天文異変と史書』、2007年9月、吉川弘文館、360頁
- ②服部英雄、『峠の歴史学：古道をたずねて』、2007年9月、朝日新聞社、全330頁